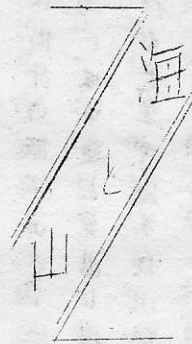
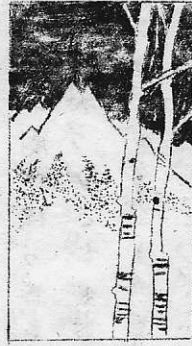


傍目をふらぬ難行苦行から去つて、菩提樹の下に人間らしい、いさゝかお求めた時始めて悟りを得たといはれる。凡夫の悟りも華僧にははらぬのであらうか。我々はそこで規則正しい生活をしばらく続けた時、少くとも前の詩の一節を解し得たと思つた。

僕が山の生活を去らんとすると當つて音はんとすることはこれだけ過ぎない。

十一月二十八日夜



先輩

小池

清

僕が都立を出てからもう二年とあります。六年間の水泳部生活によつて水といふものに対してすつかり親しみを感ずる様になりました。水と云つても色々種類があります。その中でも一番規模の大きい海に対して特に不思議なところの愛着を覚えました。日曜等に鎌倉の海に出かけ一日中真青な海を眺めて居たこともあります。海には色の問題、漣痕の問題、砂の種類の問題等、手近な所に興味深い問題が多数含まれて居ます。水泳部の人たちは海がなぜ青いか、又黒潮は何故黒いのか知つて居ますか。水の中で生活する人々は是非水といふものについて充分の知識を持つてゐて下さい。

(海については宇田道隆氏、日高孝次氏等が令りやすく解説した本が出て居ます)

昭和十九年の秋、り學校を離れて工場に、又空襲で大騒ぎの都会に、あわただしい月日を過した。機噺には丸一年と云ふもの海と頻る会合はせざる機会がありませんでした。時たま防水用木等にきれいな水の湛へられた時には顔もその中に突込んで息をこらしてみましたが、光線かうすびらく底を照らす有様を見てゐると妙に重苦しく泣きたい様な氣になりました。何か水泳部の親しい人々が遠い所へ行つてしまつた。蘇り孤独感を覚えました。これは水の圧力のさせた業かもしれません。

二十年七月末、群馬縣での動員を終へ、一ヶ月の余暇を得た僕は早速伊豆半島地角見學といふ名目を立て、仕度をもこゝろに東京を離れました。汽車が藤沢を過ぎる頃から左手に松林が見え始めました。それが馬入川の鉄橋を渡る時始めて林の間から眞青な海を眺めた時の感激は今でも忘れません。急に心がすつきりした、体の中より新しい力の湧上るやうな感じでした。沼津につき昔の面影もなく荒れかたつた街の間を通つてなつかしい中臥の海岸に出ました。こゝで久しぶりに海の音をかぎ対岸の伊豆連峯を眺めながら心ゆくまで泳ぎました。沖に出て仰向に浮ぶと雲の下の青空をB29が一機、北をさして飛んで行くのが眼につきました。これが八月十三日のことです。それから二日後伊豆の踊子で知られた湯け島を朝立ち修善寺の駅まで来て終戦を知り、行きには希望を以て眺めた馬入川越しの海を見る元氣もなく汽車にゆられて東京に帰りました。

海……廣い海には人の心を明るくする明朗さがあります。山の好きな人からは單調と云

はれる程の雄大さがあります。半島の先端に止つて眺める海、山頂よりわづかに類をのぞかせる海、海はあらゆる景色に調和して美しさを増して居ます。

此の海と對應して人は山を思ひ浮かべます。海、山と云ふと多くの人はこの相對立した言葉のやうに感じるかも知れませんが、此の二つの間は實に密接な關係で結ばれてゐるのです。世界地圖をひろげて見ると地球の表面には山あり海ありで、實に複雑な相貌を呈して居ますが、その中その背骨とも云ふべき山脈を見てみます。

ヒマラヤ、アンデス、ロツキ、アルペン等世界の山脈のほとんど全部が、水成岩となつて海中で出来た岩から出来上つてゐます。つまり昔海の中に居つた砂や泥が或る大きな力により七々、八々米の高さまで持ち上げられて現在の山脈を形成してゐるわけですから。一方此の海中にたまる泥や砂はじつかり来たかと云ふと、海が持ち上げられたと云はれる山そのものからなのです。此のやうにして両者は幾重にも結ばれた關係にある事ですが、ではじつかり初めに出来たかと思ふことが問題になります。此のことは何十億年といふ首のことにあります。大体地球の初め頃は山と海とは別々に存在したと考へられます。どちらかと云へば山の首が初めに出来たと云つた方が良いでしょう。

尋常科四年の頃、自給の水泳部員十人で登つた雲取山のこととは今でも覚えてゐる。一つとして僕たちの間と隔られてゐますが、真夜中二時頃寐らぬまま、と山小屋を出て月明りの下に続く鉄道の連峯の底知らぬ奥深さを眺め、時の自然への感激は海の場合とは

又違つた意味で大きなものがあります。幾重にも続く山脈の間にまつたくの暗黒とどろ
れ、遠くから山島の音が尾を残しながら聞えてきます。目に見えるかざりのこの山々の中
に幾十人の人々が寐、又は歩いてゐるかも知るべき。平生都會では考へもしなかつたが、山
の偉大さを感じた。

今年になつてから、連綴論文の關係で静岡縣の千五百米級の山々に数多く登りました。が
苦心して頂上に出ると南アルプスの赤名、その他の山々が手にとる様に間近く聳え、後には
宝氷山を白肩に現し、富士山が細工物のやうに、かつかう良くおさまつてゐます。又山
の本当に好きな人は谷を歩くと云ひますが、調査の關係で地質をやるものは山登りにも三
尺をうめて登ることが多く、そのため溪谷の良さは心ゆくまで満喫することが出来ず。
川の突端を廻ると突然三〇米程の大滝が現れ、探し求める特定の地層が美事に露出し
てゐる時などは思はず威光をあげて程です。山人を咬ひつける様な山の好きを知つた人は
二度、三度、山に帰つて行きます。

作 間 を 憶 ふ

先輩

寛

一生 懐

作間の跡に接してからは三月、しかも昔に對する思慕は薄れるどころか益々強くなつ
てゆくばかりである。今でも例の綱子で両手をつつこんでエリボをこしらへ、口もとにた